

【十八禁BL】

残滓

洪祢潤

【十八禁BL】

残滓

洪祢潤

一人寝の寂しさを紛らわせる為に彼奴の下帯をしがんでみる。ただ味気ないだけだった晒しが水分を与えられた事によつて舌を愉しませる玩具に変わつてくる。

唾液に混じつて下り喉を刺す様な生臭いえぐみ。このえぐみが平気になり、そして存在しなければ心が休まらなくなつてしまふ様に自分が変化したのは何時の事だったか。他の牡の吐き出した精の残滓を味わい舐るなんて自分には無縁の現象だと思つていた。精そのものの熱さと奔流の勢いを愉しむ事はまだ理解出来るにしても。

今は寧ろ目の前で迸る彼奴の熱い精よりも残滓の方に心惹かれてゐる自分が居る。それを味わう為に毎夜の様に肌を求めて満たされれば即座に遠ざけているのだから世話は無い。かつては散々気紛れに他の肌と精を味わつたものだがそれでも最後には彼奴の味が一番良く馴染むのだと納得して回帰した。どう乱れた所で仕上げには彼

奴の名残がないと落ち着かぬ。だから、他の縁はざっくりと全部切り捨てた。

もし彼奴の下帯が手元に無ければどうしていたか？無論己の下帯をしがんでいたに決まっている。己の吐き出した精を味わい舐る事は他者から見た場合恐らく他の牡の精のそれよりも難易度は高い。でも自分にしてみれば元は自身の一部であるのだから却って愛しい。寧ろ彼奴のそれより愛しい程だ。

何れにしても、だ。

一度布地に滲み込み込み乾いた精と言うのは精そのものとは違う格段のえぐみがある。吐き出された直後の精を味わって平気でいられるのは勢いと自己暗示と適度な熱さの齎す相互作用だろう。吐き出す際の痴態の効果も抜きには語れない。征服慾の延長線にあると思えば判り良いか。空気によっての変質が少ない状態であるから体液

と言うよりはむしろ水分に近い。乾し椎茸と生椎茸の味わいの違いの様なものか。

さりとして味わう際に愛しさが一切ない訳では無い。吐き出しノズルの持ち主の肌に対しての執着も瞬間的にはある。持続性があるかどうかは別として。

敢えてこの執着を名付けるとするならば、遺伝子の味に執着している、とでも言えば良いのだろうか。否、これも正確ではないな。遺伝子以外のものの味の方が勝っているだろうか。

冷静に観るならば実にシュールな光景なのだろうと思う。それなりに体の出来上がったXY遺伝子の持ち主が一糸纏わぬ姿で他人の締めた豆絞りをしがんで居るのだ。恐らくは陶酔し肌を紅く染めた状態で居る事だろう。始末が悪い事に自身ではそれを恥とは思っていないのだ。寧ろ誰かに見せ付けたいとさえ思っている。

では他の残滓：まあ、手っ取り早く言えば後門から出るものの残滓について愛着を抱くのかと問われれば、それは無いと恐らく即答出来る。即答出来る筈だ。後腔内壁に残っているものなら愛撫に紛れて味わう事が出来るとしても、外気に触れて趣が変わったあの残滓については正直愛着を抱く事が出来ない。

全く、我乍ら因が慾しいのか果が慾しいのか、選択肢に迷ってしまふ。いつその事只慾に墜ちてしまつて思考停止出来れば楽になるのだらうけれど。

夜な夜な布団の中で繰り返す自問自答と自己嫌悪と自流の三拍子。そこから開放される事を心底から望んでいるかと問われれば否と即答するだらう。その三拍子でさえも我が物であると言うどうしようもない執着が芽生えてしまっているから。悪酔いする酒程止める事が出来ないという道理に似ているのやも知れない。

ではその三拍子と彼奴への執着を天秤に掛ければどちらが重いのかと問われれば：正直自分でも判らない。彼奴と出会ったからこの三拍子に目覚めて墜ちてしまったのか、それとも彼奴の存在は只自分の慾を目覚めさせる為の触媒でしかなかつたのか。

少なくとも彼奴の方からこちらに対し具体的な示唆が無かつた事は事実だ。寧ろこちらが彼奴の思惑を先読みして動いていたと言うべきだろう。その先読みがこちらの思い込みの産物である可能性も否定出来ないが。

そういえば彼奴が下穿きを洋風のものから下帯のみに変更し統一したのは何時の事であつたか。少なくとも知り合つた当座の下穿きが洋風のものであつた事は間違い無い。ジョグストラップ姿で無言のまま誘われた事もあつた。微妙な加減で体液が染み付いたブリーフ姿で抱きつかれたという事も。

思えばその余韻を愉しむという所に三拍子の原点があつたのだからか。彼奴の下穿きを口に含む事に戸惑いが無かつたと言う事だけは覚えてゐる。そう。そこから静かに墜ちていたのかも知れない。上の光だけが眼に観える底の知れない欲望の沼に。

そこでふと考える。自分の欲望をどういふ風に分類すれば他者に対して一番説明し易いのかと。誇らしげに賢しら語りをしたい訳では無い。仮想術学趣味みたいなものだ。

少なくともこの慾は肉体に対しての直接的な慾ではあるまい。世間で言う所のフェティシズムと言うものに近いのだろう。自己愛と云うものとは少し趣が違ふ様な気がする。自己愛と云つて済ませる事が出来るのであれば態々彼奴の様な他者を介在させる事はあるまい。仮想分身として彼奴を利用してゐる……と云う説明はかなり苦し

いものになるだろう。確かに肉体構造としては随所部品の大小の差はあれ同じ構成で成立しているのだしある程度の生理回路の作用も同じだ。でも、本質的な思考回路は違う。そう言う二個体を概念上とは言え分身と言いつ切るのは余りに早計だろう。鏡像扱いなんで以ての外。彼奴の面体よりこちらの面体の方が少しは整っていると言う自負程ある。

出来るだけ、出来るだけ適切な概念を探すとすれば交接相手の代行人、とでも彼奴を位置付けるべきか。

理想を白状してしまえば自分の鏡像と交接した方が限りなく都合は良いのだ。それも意思を持った鏡像ではなく、こちらの意のままになる鏡像である方が望ましい。以心伝心なぞは必要無い。こちらの意志の通りにだけ動いてくれればそれで充分だ。それこそクロール乃至はレプリカントであれば良い。クロールであれば体温があつ

た方が良い。体温の無い人肌の感触は正直良くは無い。嗜好にも拠るのだろうか、少なくとも自分の感性にはそぐわしく無いと感じる。これがレプリカントであった場合は逆に体温が無い方が良い。氷枕の様なものだ。快樂を持続させる為の適度な冷却装置は近くにあるに越した事は無からう。

ふと、凝固していない硝子で出来た自分の鏡像と交接できたら、などと埒もない妄念を抱く。寢床を経て室内に充滿するのは自分の体臭と精の臭いだけ。

鏡像も精を造る事が出来たのなら精の臭いは自乗となりかなり理想的な状態になるのではないだろうか。

ただここで一つだけ置いておくハードルがある。

自分は自身の精に愛着は持っているがそれを自分の後腔に注ぎ込みたいとは思わない。喩え物理的に可能であったとしても。

慾しているのは自身の精の味わい、ただそれだけだ。そう、その筈だ。

然し、現実に立ち帰ってみれば己の精を味わうよりも彼奴の精を味わう事が好きな自分が居る。己の残滓を味わう機会を造る方が遥に楽な状況であるにも拘らず、だ。

冷えて凝った精なら駄目で一度渴いて然る後に蒸れて戻された精なら受け付ける、と言う訳か。矢張り熱い精が一番の理想と言う訳で彼奴を手放せないのだろうか。

全く我乍らややこしい思考回路だと思う。肉慾ならば肉慾と素直に認識すれば良いものをこう言う風に言葉を弄して筋道を無理矢理つけて納得しようとしている。その納得は誰に対してのものなのだろう。自分自身が心底納得しておらず納得していると思ひ込みたい為に弄している言葉だと言うのに？

そう言う事を考えながらも屹立はするし堅牢にもなるから人間の生理とは好く出来たものだ。幾度か経験した受入の時も思索に耽っていたにも拘らず絶頂感をも味わった事もあった。思索と言っても高尚なものでは無い。注入された精を吸収出来たらどう言う事が可能かなどと言う埒もないものだ。自らの肉体に女性体の機能を搭載しようとは思わない。遺伝子を持った分身を創りたいと慾するのなら肉体を煩わさせず試験管を経て然るべき装置の中で育てる方が恐らく失敗が少ないだろう。自分が慾しているのは百パーセントの分身なのであって自分の面影のある他者では無い。手っ取り早く言えば血の通った鏡像だ。

そしてそう言う存在が産まれ出た場合、その存在に対する喜びを他者と分け合おうとは思わない。彼は自分なのだ。

もつともそこまで行くと科学妄想の領域だろうからいい加減思考

は自分で止めている。願望は手の届く範囲でよかろう。手の届かない範囲の願望に身を焦がし空転して快樂を味わうべき時間を浪費する方が勿体無い。

こう言う調子だから恐らく自身と相違わぬレプリカントと一戦交えたとしてもなんだかんだと理由をつけて彼の存在に肯定を与えようとしないうら。現在の技術なら精々違うのは後腔内壁の皺の程度のものだろうから創造に踏み切れれば良いものを躊躇い止まっているのはそう言う理由だ。

結論としては只管に自分が好きなのだろう。と、すればこの渴望を解決するには並行世界の自分自身と一戦交えるべきなのやも知れぬ。問題は並行世界の自分にこう言う嗜好があるかどうかであるが：自分同士なのだから何処かで妥協案を設定する事は出来るだろう。多分。

しがみ尽くした豆絞りを観ながら、気分が冷えて行く過程をじわりと感じている。洗うべきか洗わざるべきか。彼奴なら洗わずともきつと微妙な表情をしつつ着用し、又自分の手元にたっぷりと残滓を付けて寄越すだろう。どうもそう言う風に彼奴に弄ばれている気もしなくはないが快楽を人參よろしくぶら下げられては否定しようと言う理性が失せる。代わりの一本を寄越せば寄越したで新品の晒しは締め心地が悪いのだと控えめな文句を言うだろう。それもそれで又煩わしい。

いつそ自分が締めた後の奴を洗わぬまま送りつけてやろうか、などと企んでしまう。実際世間にはそう言う嗜好を持つ人もいるだろう。自らの残滓のついた着古しをネット上で売り捌く人も居る時代だ。嘘か誠か判らぬが生産者表示よろしく態々面体を晒して購買欲

をそそろうと仕向けてみたり。

自分には却ってあの感覚が判らない。

確かに需要があるから供給するのだろうけど、全く見知らぬ者の残滓を味わうのはそんなに心地良いものだろうか。好みのタイプなら無条件に受け入れるという感覚が手伝ったとしても所詮は行きずりでしかないのに。

どうせ売ろうとするのならば生産者表示なぞ無い方が良い。あれは却って興殺ぎと言うものだ。他人を縛りたいと言う呪詛を振りまくのが主たる目的であるなら兎に角として、快樂を引き出す玩具を供給する業者のつもりであれば購買者の妄想の自由枠を確保供給するのにもまた業務の一環ではないのか？相手が見知らぬ行きずりなら尚更の事。

他者を縛りたいのであれば自身も又縛されるのだと言う事を学ん

で置いた方が良い。その上で見知らぬ者に縛されるとはどのような事かと自問自答しておく尚良い。少なくとも自分はそう言う縛される方は真つ平御免被る。生産者表示があれば尚更御免だ。

知己に縛されるなら兎に角として見知らぬ者にしたり顔で縛されるなど恥以外の何物でも無い。快樂は渴望するけれどもその快樂はあくまでも自分が望む形式のものであつて教え込まれ滲み込まされるものではない。我乍ら分不相応とも言われそんな贅澤を口走る様だが正直な感覚だから仕方が無い。

こう言うのも潔癖症の一種と見做されるのだろうか。実際の行為は相当淫らで潔癖とは程遠いのであるが。

そして埒もない仮想。あの生産者表示が彼奴のものであつたなら自分はと言う反応を示すだろうか。……正直、判らない。彼奴への執着は最近やつと自覚したが独占したいのかどうかまでは自覚出

来ていないから。

そもそも自分自身が縛される事を嫌うものだから他者に対しての束縛を強要出来ない。そう、しないのではなく出来ないのだ。縛してから先を考える事が出来ないから。縛してから何をすれば良いのかが皆目見当がつかない。それこそ馴れ合いなら縛さなくとも出来るという腹積もりもある。縛した所で成立する絆は案外と儂いものだ。第一世法による保証は一切無い。元より望むべくも無い保証だが、紙切れ一枚の盟約であつても有ると無いとの大いなる違いには考えさせられるものはある。

こう言う煩わしさに惑いたくないから一瞬の温もりの断続に身を任せる同嗜好の者も多いのだろう。少なくとも執着に煩わされずに快樂を追求できる状況は羨ましい。その反面、自分はその孤高と独善に耐え切れるだろうかと不安に駆られもするが。

自分に与える事は出来ないだろう、とは認識している。だからと言つて享受一方や捧げられる一方で安寧を得られるかと問われれば、恐らく否だ。反動に怯えながらそれでも一瞬を優先して快楽を享受出来ると言う神経回路：羨望はするが実装はしたくないものだ。恐らく自分は中途半端な快楽もどきを貪りつつ完全燃焼は出来ないだろうから。

そう言う自分が彼奴の抜け殻なら安心して使用できるのはどう言う心理作用か。訳知り顔の人間であればそれを愛と名付けて一件落着とするのだろうか、

本体への執着が欠けた状態でもそれは愛と呼べるものなのだろうか？せめて本体の部品の一つにでも執着していたならば愛云々の呼称を甘んじて受け入れもするが、それすらも無く残滓や抜け殻だけに愛着と安堵を示すという態度を愛と呼ぶのは愛と言う感情に対し

て失礼極まりない分析であろう。

それならばいっそ肉慾の一変種とでも認識して置いた方が良い。彼奴も自分もそう言う事であれば自由で居る事が出来る。特に彼奴に関して言えばこちらの勝手で振り回している様なものなのだからこれ以上の束縛要素を背負わせる事があつてはいけない。いざとなれば自分が唆した事にして彼奴は清廉潔白である」と証言すればよからう。

彼奴の行動がエスカレートしたのはこちらが無意識の内にでもそう要求してしまったからだろう。そう言う風に考えるならば一通り説明は出来る。

彼奴は彼奴。自分は自分。そして、愛を知らずに慾に墜ちた愚者は自分一人。それで全ては証明可能だ。

そして、その証明が自分の現在地を形成している訳である。

『御機嫌麗しゅう』

不意の声掛かりに思索への逃避から現実に戻る。声の主は判っているので目視で確認する迄もあるまいと頭の隅で考え、それでもとりあえずはと顔を向ける。思索と妄想の後だから気恥ずかしくはあるが、気に掛かる相手ではあるので。

「珍しいな。一人で？」

「そう。調子は？」

「妄想に耽る程には調子が良いね」

「材料には事欠かない、と？」

「実はそろそろ禁断症状が出そうだね」

御道化を含ませた口調で誘ってみる。いきなり行動に出ても良い

のであるが、偶にはこういう趣向も無いと飽きる。

「もう？ 予定より少し早目に来たから良い様なものの」

満更でもない苦笑と共に肌蹴られる上衣。そこから垣間見える肌は何かを期待するかの様にしつとりと濡れている。

「禁断症状が出てから僕が来たらどう振舞うつもりだった？」

「サア？」

視線を粘りつかせながら短く答えておく。自分の体もいよいよ反応し始めた様だ。二種類の牡の体臭が静かに混ざり合って理性を揺らし始めている。

視線で促すところらが逆に促された。どうやら敵はこちらよりも反応が著しいらしい。冷静に振舞って冷却を図った様ではあるが。

下肢に貼り付いた人工皮革をじっくりと剥ぎ取る。人工皮革であるから無臭である筈なのに、剥ぎ取った瞬間眩暈がする程の匂いが

立ち上る。夥しい先走りの所為だ。

「早目に来たのは、この所為か」

「積極的に認識したくないけどね」

凶星だったのか口惜しいのか珍しく耳まで赤らめながら言い捨てる。いつもの君主然とした伶俐さが嘘の様だ。自分の前では殊更にそう振舞うのにそれすら今は忘れている様に。

「確認出来ただろう？」

「ああ」

「だったら」

「どうすれば良い？」

何気ない問いの心算だった。いつもと違う様子なのだから当然の様
様に違う様式を求めているのだらう、と確認する心算で。

「意地、悪」

でも、それは目算違いだった様だ。言葉を振り絞ったと同時に全身が赤味を帯び始め、体臭はいよいよ匂い立つ。下帯から立ち昇るのは：先走りではなく迸りの匂いか？

「こんな風に、したんだろ？」

甘える様な、詰る様な声。

「僕をこんな風にしたのは、あんただ」

今の自分を否定したいかの様な言葉。だがそれを潤んだ眼差しで口走るのは逆効果と言うものだ。

そして、続け様に抱擁と荒々しいキス。

後はただ一瞬の慾に墜ちて行く。

最初に汚してしまったのは自分。

自分の遺伝子を分けた分身だと誰かに言い訳しながら快楽を一方

的に呷り、そして貪った。彼奴の開花する様を確認して、本能の欲求だと嘯いて安心しようとした。

順当な星の下で生まれていれば彼奴に行き渡る自分の遺伝子は四分の一に過ぎなかっただろう。しかし、彼奴に受け渡された自分の遺伝子は都合半分となった。否、ほぼ全ての遺伝子が受け渡されたと言つて良い。単為生殖では無い。仮初の反転鏡像と生殖した過程が繰返されたただけだ。

いつそ単純な分身であれば言い訳も苦悶も無かったのかも知れない。理不尽と憎悪が発生したとしても。

しかし、条件は揃ってしまった。呆気無い反転鏡像の崩壊。そしてそこから生み出された個体は自らの反転鏡像と共に是も又呆気無く別の次元に旅立ち、此処には自分と彼奴とが残された。まるで中継個体が端から存在せず、直系の縁を結ばれていたかの様に。

それでも二人の間に愛着と言う絆は多分存在しないのだ。慾のギブアンドテイクはあつても。

だからせめて其処に憎しみが介在する様に、とこう言う形式を採つてみた訳であるが：却つて毒になつたと言う事か。むしろ一緒に墜ちる選択をした方が自分の為にも彼奴の為にも幸いであつたと言う事なのかも知れぬ。

豆絞りをしがみながら貫かれている彼奴を見下ろしながら、そう言う褪めた思考が駆け巡る。声を抑える為に豆絞りをしがんでいる訳では無い。快樂の誘引装置としてしがんでいるのだらう。後腔の加減の良さがそれを雄弁に物語っている。だから敢えて唇は求めない。互いの性器と後腔、そして精とその残滓だけが自分達の関係を形成する基本要素だ。他の部分はそれらを際立たせる為の大道具に過ぎない。

そして不意に妄想する。もし今この瞬間に自分の心肺と脳機能が停止したら交合は続くのだろうか。無論続くだろう。精巢の機能さえ継続して居れば。逆の立場であれば自分ならそうする。

そして精を搾りつくされた残滓は朽ち果てやがて灰燼に帰するのだ。そうなってこそこの執着は初めて成就するのだろう。

【了】

初出

T w i t t e r 覆面BLウェブアンソロジー 仮面蜜戯

<http://maschera.mimozza.jp/> 二〇一一年一月公開

脱稿…二〇〇八年某日

後書き

これはかつて存在した『覆面BLウェブアンソロジー―仮面蜜戯』に寄稿した内の一編となります。

きっかけはもう朧な記憶となってしまうので、正確を期する為に敢えてここでは開陳しませんが、普段中々書く踏ん切りのつかなかった物語を書く良い切っ掛けを戴いたと北叟笑んだ事は覚えております。

何時の間にかサイトが消失し、復活の気配を二年程待ちました。が気配が無い為、お手隙の時の娯楽にと供する次第です。

渋祢潤

ことぶどううり・くすこ

奥付

【十八禁BL】

残滓

【二〇一五年十二月二八日初版】

ぶどううり・くすこ（渋祢潤 名義） 個人誌

xqo_gm@yahoo.co.jp

※本作は無償頒布品です。

残滓
【18 禁 BL】

<http://p.booklog.jp/book/103747>

著者: 渋祢潤 (shibune jun)

【ぶどううり・くすこ】

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/xqo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/103747>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/103747>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ